

アメリカ家政学の系譜—学会誌分析— (第11報) 総合

静岡大教育 ○村尾勇之、椋山女学園大生活科学 東珠実、

榎アガハタムス 渥美美晴、金城学院大短大 古寺浩、

名古屋文理短大 鈴木真由子、三重大教育 吉本敏子、西遠女学園 藤田亜子

目的 本研究は、アメリカ家政学会誌にみる研究内容の歴史的推移から、家政学の本質を探ろうとするものである。前報までに、論文の全体及び原論、経営、家族、衣食住などの各領域についてみてきたが、本報では、その他の生活の諸側面にかかわる「総合」領域について分析する。すなわち、総合領域の論文にみる研究内容の歴史的系譜について、量的・質的な特徴を把握し、その研究動向を概観することを本報の目的とした。

方法 1909年～1989年の JOURNAL OF HOME ECONOMICS(724冊)及び1972～1989年の HOME ECONOMICS RESEARCH JOURNAL(76冊)における分析対象論文 5,765本の中から 494本を総合領域の論文として特定し、①生活、消費者教育、女性・婦人、高齢者・福祉、アート、エクステンション、その他の7つの中分類領域ごとに、年代別論文数、構成比を算出した。②年代別構成比に基づいて年代間の類似率を求めた。③キーワードによって、各年代の研究内容を特徴づけ、80年間の研究動向を把握した。

結果 ①全期間を通して、「生活」に関する論文が全体の3分の1、「その他」が全体の4分の1を占め、アートやエクステンションは、それぞれ1割程度であった。②1910年代と1940～1950年代は「その他」、「生活」、エクステンションに、1920～1930年代は「生活」とエクステンションに研究の重点がおかれ、1960年代以降は、高齢者や女性・婦人、アートなどを含む多領域に研究関心が広がることが理解された。③初期の「生活」領域における外国生活への関心や「その他」における施設管理の重視、1960年代以降の加齢の研究、1970年代以降の女性解放と差別をめぐる問題意識のあらわれ等が特徴的であった。